

保育環境について考える(3) 飼育動物

原口 純子

ヤギのいる幼稚園

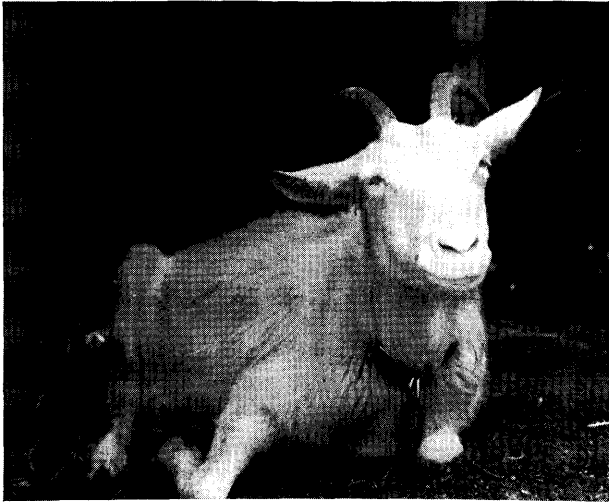
かつて勤務したO園では、園庭の北東の角にヤギ小屋があって、雌ヤギのメエ子を飼っていました。いかに当地が田舎とはいえ、公務員宿舍ビルのただ中にあるこの地域で、ヤギを見る機会はほとんどありませんでした。

ヤギの他に雑種の雌犬のペロ、ガチョウの花子と、ジャンボ母さんという大きな白ウサギとチャボのコッコさん一家が園庭に住んでおりました。アパートでは金魚や小鳥以外には動物を飼うことが禁止されていることもあつ

て、園が休みの日曜日や祭日になると近所の親子連ればかりか、中には車に乗って、わざわざ遠くから動物を見に来ている家族が結構いました。二、三歳の乳幼児から小学生に至るまで小屋の前にしゃがみこんでなかなか動かないのです。今日盛んに「地域に開かれた幼稚園」ということが叫ばれていますが、ヤギのいたミニ動物園のような幼稚園は文字どおり地域に開かれていたし、沢山の地域の人々に喜ばれていました。

またある年、入園後しばらくして、四歳児の母親が、

「昨年の十月頃に息子を連れて、来年入る幼稚園を決めるために、あちこちの幼稚園を見学して歩いたのですが、息子にどの幼稚園がいいかを聞いたところ、即座に



▲ヤギのメエ子

『ぼくはヤギのいる幼稚園に行きたい』と言ったので、こちらにきめました。」と話されたことがありました。何百万もする立派な総合運動遊具施設もたった一頭のヤギに勝てないことが分かります。それほどに、動物は子どもにとって魅力のあるものと言えましょう。

教育長さんのチャボ

幼稚園で飼育を始めたきっかけは、教育長さんにチャボをもらったことになりました。

その昔、当市がまだ合併前の村であった頃、時の教育長さんは、中学校の校長を定年になられた方で、人を育てることに熱意のある方でした。ある日教育長さんは、村立の五つの幼稚園を視察して回られ、動物を飼っていないことに気づいて、自分の家で飼っていたチャボに卵を抱かせて雛をかえし、自ら各園に一羽ずつ分けて下さったのです。「幼稚園で動物を飼ってごらん下さい、動物は子どもにとっても良いものです。」と言われました。教育長さんは言葉で「幼児教育は大切です」とか、

「しっかり良い園の経営を下さい」とは一言も言われ
ませんでした。が、どの園も、本気で幼児に良い経験を持
たせたいと意欲を持った事を思い返すと、我々はチャボ
に教育され、チャボを配った教育長さんは本当の教育者
であったと思います。

保育と飼育動物

しかし、どうして幼児は生き物を好み、何が幼児を育
てるのでしょうか？

それは動物が、生きていて世話がかかる事につきるの
ではないでしょうか。保育に効果を持つ動物は、世話の
かからない、手軽な金魚や小鳥より、重くて、臭くて、
手間や世話のかかる動物なのです。例えばモルモット、
ウサギ、チャボ、アヒル、ガチョウ、犬、ヤギ等なので
す。

ではなぜ生きているものは人を育てる力を持つので
しょうか。一つには、生命の持つドラマの感動、例えば
チャボであれば卵を生む、ヒヨコがかえる、成長する、

死ぬこともある等です。なるほど、年とった雄のチャボ
が一匹の時には全然人気がありませんでしたが、となり
のウサギの親子の小屋には幼児が毎朝餌をやりに来るの
です。チャボの世話をしたい幼児はいませんでした。と



▲チャボのコッコさん一家

ところが、雌のチャボをこの春入れるとヒヨコがかえり黒山のひとだかりになりました。命の誕生の感動、ヒヨコの愛くるしき、チャボ親子への家族としての共感のようなものも人気を集めています。

第二に飼育動物は人を受容してくれるからではないでしょうか。

ウサギやモルモット等の小さな動物はあまり人見知りせず、どの幼児でも平等に受け入れてくれます。幼児はもとより大人でさえ人は動物を見ると餌を与えたくありません。動物は満腹でない限り、与えた餌をムシヤムシヤと食べてくれます。食べてもらうととても安心し、うれしい気持ちがあります。餌を与えずにただ見ている時より、餌を食べてもらった時の方が充実感があるし、動物と仲良くなれたような気がします。

また、動物が言葉と話さないのも、良いのだと思います。動物は何も言わずだまって、じっとして、或いはかけずり回っているだけです。人が不安な時話しかけられるより、そこに居てくれるだけでいいということもある

のです。

こうして動物は人間の気持ちを受け入れ、癒してくれている部分があるように思います。それは水槽の金魚でもカメでも言えることです。

入園間もない不安定な幼児の気持ちを、ウサギやモルモットは良く受け止めてくれます。人によって差別や拒絶をせず、もくもくと餌を食べてくれるウサギの替りをぬいぐるみのおもちゃが代用することはできないのです。特にふわふわしてやさしい小ウサギに友達との関わりの難しい幼児が支えられることは度々経験することです。

ままごとには食事場面が多く幼児は次々に教師に砂団子や料理を御馳走して、教師がおいしいおいしいと一生懸命食べてあげるのも、幼児の気持ちを受け入れる点において、飼育動物の餌と同じ質のものではないかと思えます。

第三に共に生きる仲間としての喜びがあります。

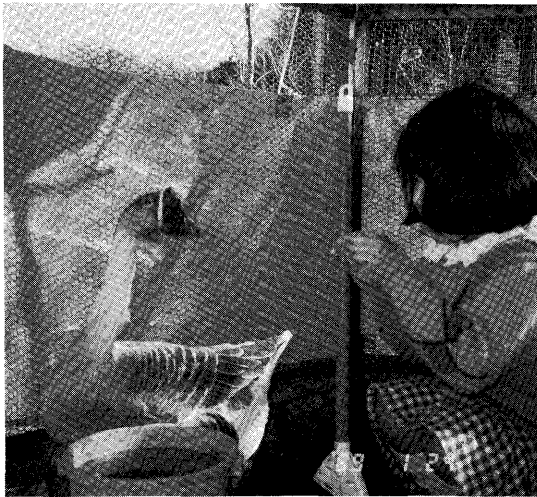
犬のペロを飼った年長のかえで組では、当番のグルー

プで世話をしていました。世話をする程に、なつき、犬との心のつながりができて、世話のやりがいのある動物でした。園外保育の時に、一緒に散歩に連れて行くこと喜んでついで来ました。ペロは大変おとなしい雌犬で、吠えたり噛みついたりすることはありませんでした。餌は自分達の給食の残りから犬の食べられる物を取りだして与える等、幼児がいつでも、ペロを、クラスの一員として心に置いていました。しかし犬は毎日散歩が必要なため、PTAのボランティアグループが飼育活動を支えてくれましたが、幼稚園での飼育動物としては難しい面がありました。

幼児と心のつながりが深まる点では、年長のいちよう組が飼っていたガチョウは面白い飼育動物でした。人の顔を良く覚え、知らない人が来るとグワグワッと大声で叫びますが、常に世話をしている幼児や先生、ボランティアのお母さんが来るとうれいという表情で体をすりよせてきたり、羽をひろげてバタバタさせて喜びを表現します。大きな卵を産み、各クラスに分けてホット

ケーキを作って食べました。体も大きく存在感がありました。

気持ちの通じる動物はデリケートでもあり、年長向きかもしれません。



▲ガチョウの花子

第四に世話をし、愛する経験としての飼育活動です。

兄弟の数の少ない今日、幼児は親や教師、身の回りのすべての人から、常に保護され、愛される立場にあり、自分が能動的に保護し、可愛がるという経験は比較的少ないのです。

飼育動物は幼児が餌を与え、水を与え、フンの散らばる小屋の掃除をして世話をします。こうした世話をする立場が、生きるものへの思いやりや慈しみの心を育てるのです。

生きて動き回る小ウサギやヒヨコをかわいいと思ったり、自分のクラスで飼っている犬を大切に思う気持ちを経験できることは他には代え難いものです。

第五に当番活動について。

飼育というと即座に当番活動と思うほど、保育活動における飼育は当番や係り活動と結びついていました。動物がかわいいから飼う、というより、飼育は厄介でも当番活動を通して幼児を育てるのに有効であるから動物を飼うという時代もありました。しかし仕事を割り当てて

ローテーションで回して、動物に対する幼児の気持ちをかまわず、義務のように世話をさせるのでは、いたわりの気持ちも思いやりの気持ちも本当には育たないのではないかと近頃は思います。

今日私の園では、ウサギやアヒル、チャボなどがいますが、飼育当番活動というのはやめています。廊下に野菜をきざむテーブルの「餌づくりコーナー」が設けてあります。家からにんじんやキャベツを持ってきてむしったり、きざんで餌を作って、やりたい幼児が世話をしています。

金魚が好きな幼児は毎日金魚の餌やりに職員室に餌をもらいに来ます。

飼育当番を果たすことによって「私達が餌をやらないとウサギが死んでしまう」という責任感を養うという考え方もありますが、五歳の幼児に命を預けることは無理があるように思うのです。責任感は飼育だけで育てる訳ではなくもう少しゆっくり生活全体の中で育てていけば良いと思います。



▲ウサギのジャンボ母さん

第六に命あるものがそこにいるということ。

飼育動物が何かに役立つと言うより、幼児が日常生活する環境にウサギやモルモットやガチャウ、金魚やザリガニ、ダンゴ虫、スズメやツバメ等、様々な生き物がいるという、その事自体が大切なことであると思います。ヤギは特段何もしてませんでした。けれどもヤギがいるこ

とは園の幼児も教師も送り迎えをしている母親にも地域の人々にもとてもうれしいことでした。

こうした動物や虫や鳥に教師がどうかかわるかが大事なポイントです。

四歳児担任のM子先生は子どもの時から家で鈴虫を飼っています。家から飼育鉢に鈴虫の卵を持ってきて孵化させ、白いひげの小さな鈴虫の赤ちゃんに、毎日幼児と一緒に、餌のきゅうりの交換をしたり、霧を吹きかけて世話をしていたのですが、じっと見ていたY子がある日「これ鈴虫さんどうぞってママがいったの」と言って大きなきゅうりを持ってきました。Y子が家に帰って、お母さんに先生が鈴虫の世話をしていることを話していたことが分かります。

命あるものが人間と共に生き、生活しているということが意味があるのです。

飼育のボランティアグループ

幼稚園のミニ動物園にヤギ、犬、ガチャウ、ウサギ、

チャボ等がいた時代、それは地域との共有財産のようになっていたのです。これだけのものをとっても園児と職員だけでは世話しきれず、PTA活動に自発的なボランティアグループができて、飼育を支えていました。犬の散歩、飼育小屋の掃除や修理、防寒用のビニールシート掛、休暇中の世話、その他園児や職員の手の届かない所を後ろから大きく支えてくれていたのです。

このグループのリーダーをしてくださったNさんは若い時代をアメリカで生活された方で、「自分の子どもが幼稚園で世話になってるので、感謝の気持ちで、自分が幼稚園のために出来ることは何かないだろうか」という思いから「職員だけでは手に余る飼育の手伝いをしよう」と仲間を募ってグループを作ったのです。八人程のメンバーが集まり、お父さんも力を貸してくださいました。単なる有志のボランティアグループとしてではなく、PTAの任意サークルとして組織の中に組み入れて予算を付けた事はその後の活動を確かなものにししました。園としてもどんなに助かったかしれません。この時

以降この園の伝統的な活動となって、園長が替っても、ずっと継続されているのはありがたいことです。

おわりに

五月の始めから園の職員室のテラスの軒先にツバメが巣をかけて卵を産み、暖め、雛をかえしていました。親ツバメが忙しく子ツバメのために餌を運んでいる様子を幼児も先生と見守っていたのです。

けれども、来週には巣立つと思われた日曜日に、小学生がやってきて巣を壊して雛を持ち去りました。月曜日の放課後に一人の小学三年生が、虫の息になった七センチ程のツバメの赤ちゃんを手のひらにのせて返しに来たのです。私は皆が巣立ちを楽しんでいたこと、親ツバメの気持ち、そして、雛は巣から出したら人間には育てられない事を話してそのまま持ち帰ってもらいました。小学生は今にも泣きそうな顔をして、死にそうなツバメの雛を持ち帰りました。彼が命の痛みを知ってくれればいいのですが。

(茨城県公立幼稚園)